

岐阜同朋

ぎふどうぼう

- 真宗同朋会運動発足50年にあたり 教えに導かれて (岩佐善夫)
- コラムしょうしんげ ● 清沢満之終焉の地 西方寺
- 「救い」とは何か? その2 ● 原発銀座で思う

107



清沢満之終焉の地 西方寺(太鼓堂)

愛知県碧南市浜寺町



今、日本には54基の原発(原子力発電所)があります。岐阜県の隣の福井県には「敦賀原発2基」「美浜原発3基」「高浜原発4基」「大飯原発4基」「高速増殖炉もんじゅ」「新型転換炉ふげん」の15基の原発があり、原発銀座といわれています。

昨年3月、福島原発事故後、風の向きがとも重視されました。どちらの方向に放射性物質が飛んだか、どのように拡散したかと。そのため、避難や帰宅困難となりました。現に40キロ離れた飯舘村では、その風向きで悲劇が起きてしまいました。

今年3月、福井県美浜町水晶浜から仲間達と1000個の風船を飛ばしました。

福井県で原発事故が起きた時を想定して、放出される放射性物質を風船にみたくて、その広がりを調べるためです。

10月4月、秋から春にかけて北西〜北北西の「伊吹降ろし」という日本海側から吹く季節風によって、岐阜・愛知・三重・滋賀・静岡県等で98個の風船がみつかり、なんと80個の風船が岐阜県内でした。岐阜で最初にみつかった時間は風船を飛ばして2時間前後でした。いざ福井県で事故が起きれば、風下の東海地方(濃尾平野)が危ない。放射性物質が拡散する恐れが出てくるのです。

岐阜県には原発はありません。しかし原発のない地域でも原発事故の災害に無縁ではなく、他



人事ではない、身近なことであることを知ってほしいです。

「放射性物質(別名「死の灰」)とは、放射線を出す能力を「放射能」といい、この能力をもった物質のことを「放射性物質(ヨウ素、セシウム、プルトニウムなど)」といいます。放射線は人体を構成している細胞のDNAを傷つける能力をもち、人体にさまざまな影響を引き起こし、又目に見えず、匂いも味もしない、五感では感じられないものなのです。

放射線の強さが元の半分まで減る時間の長さを「半減期」といい、ヨウ素131は8日間。セシウム137は30年。プルトニウム239は2.4万年。ウラン238はなんと45億年とされています。

原発事故が起これば「死の灰」は風によって流れ、風がどの方向から吹いているかで全てを決してしまふ…。

今日も風は吹いています。これからは夏の風。方向は変わって来ますが、風向きも参考にして原発について考えるキッカケにして頂きたいです。



先日、ある店に行ったらテーブルの上にお花が飾ってあった。ガラスの小鉢に生けてあるお花はみずみずしく、きれいに咲いていますね。」と店主に声をかけると、「はい。でもこれ造花なんですよ。」と。全く疑うことなく生花だと思っていただけに、これが造花だったと知らされると、少し淋しさが。

数日後、我が家の玄関の1輪挿しにお花を入れていたら、来客の方が「造花かと思ったら本当の花なんです。」と。

今、本物と偽物の見極めが難しくなっているのは、お互いが限りなく近づいている事と同時に、本物と偽物を見極める私たちの目も衰えているのではないかと。

物体を見る目だけではなく、物事の真偽を見届ける心の眼も…。

本物と偽物が混在する中で、真偽を問うていく心を忘れないようにしていきたい。(玲)



編集後記

真宗同朋会運動発足50年にあたり

「教えに導かれた」

郡上市八幡町本覺寺住職 岩佐善夫

私は1951(昭和26)年生まれ。世に言う還暦を迎えたわけですが、地域は高齢化、私はまだまだ若い衆扱いで、特別な感慨はありません。しかし、昨年は前住職の二十七回忌、お寺の仕事を引き継いで26年が経った。このことは感慨深いものがあります。

私のような者がここまで住職として仕事を続けてこられたのは、我慢強い門徒の方々のおかげ以外の何ものでも有りません。しかしそれを忘れてしまうと、今一度我が身を振り返る必要を感じているところです。また、何年たっても未熟な私、真宗寺院に住みながら、真宗の教えが生活の中心にすわっているかと問われると、答えに窮する有様、誠に恥ずかしい次第です。

前住職は64才で急逝。その時は私は34才。突然の交代でとまどったことを思い出します。当時、私は小中学校の教員。仕事に追われ、お寺の仕事はすべて住職任せでした。「あと少なくとも10年は大丈夫だろう」などと勝手な計算をたてていました。そんなスタートで、何の準備もできていません。葬儀は隣寺の御老院にすべてを聞きながら行いました。

葬儀の後、御老院から「葬儀は大切な教化の場です。少しでも法話をするといいです。」と言われたことが今でも心に残っています。そんな励ましもあつて、あらゆる場で拙い内容でも法話だけは必ずしようと心がけてきました。門徒の方々から頂いた「若いごえんさん」に変わって心配したが、

わかりやすい話をしてもらえるので有り難い」との言葉も、お世辞だとは分かっていながらうれいものでした。

しかし、しばらくすると新しい法話をしようと思うあまり、ネタ探しに苦慮するようになりまし。なさけないものです。心の中に、いわゆる「ウケをねらう」お粗末な気持ちが生まれてきたのです。また、問いかけにうなずくことだけしかできず、できるのはなぐさめの言葉をかけるだけという自分の姿もいやになりました。親切で行う「なぐさめ」には意外な危険が潜んでいます。「もつと苦し

い人がいます」「どんな苦しみも我慢すればなんとかなります」「時間が解決します」等々。結局、我慢をしているだけになります。また、今盛んにもてはやされる「癒し」も、一時のぎで苦しみをごまかすだけだという問題があります。少し大げさな言い方になりますが、なぐさめや癒しに終始する私の姿は、真宗の教えを頂きながら、真実を求めず、偽りの言葉で

お茶を濁して自分の体裁を繕う姿だといえるのです。蓮如上人のお言葉に「仏法をあるじとし、世間を客人とせよ」(蓮如上人御一代記聞書)とありますが、肝心の要の生活の場面では、世間の法をあるじとして仏法は付け足し程度にしてしまっているのです。

真宗寺院の住職として門徒の方々にお育てを頂く、そのような有り難いご縁を頂いて二十数年たった今、改めて仏法をあるじとした生活を求めていきたいと思ふ所です。しかし、それは「立派な人になる」ということではないでしょう。立派な人とは「世間体」を迫及することでしょうし、私にはできないことです。また、「正しい生き方」を考えると、これも正しと安易に示すことは危険です。国際ボランティアをなさっている方が「正しいと思った時からまちがいがはじまる」と話されたことを記憶しています。過去の戦争でも常に「正義のための戦い」と語られていました。

親鸞聖人に「きくというは信心をあらわす御のりなり」(一念多念文意)というお言葉があります。「きく」とは私の姿を聞くことです。私の姿をあきらかにすることが信心だと教えてくださっている。きれいごとは通用しないと言って世間に流され、娑婆はこんなものだど歎いて自分をごまかして生きている、その姿を、仏法を鏡としてはつきり聞いていく、このことが毎日をしつかり生きていく道を開いていく。自身の姿が本当にわかった時、浄土を願うという進むべき方向が決まる。「仏法をあるじ」とした姿はここに

あると思うのです。東日本大震災の後、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の詩が各地で朗読されていると聞きます。私には、その詩の最後こそが心に響きます。「サウイフモノニ ワタシハナリタイ」と結んでいます。そこには負けてしまふ強くなれない自分を深くみつめて歩む道を求め

ていく、そんな姿があると勝手に解釈しています。「負けるな、強く

なれ」と尻をたたき詩ではないと思つています。

話は変わりますが、夕事勤行に「浄土三部経」を少しづつ、ゆっくりゆつくりと読むことを続けています。スピードを落とせば落とすほど読み間違いが多いことに気が付かれます。あまりの多さ

自分でも恥かしくなるほどです。これまで何回となく読んできた『浄土三部経』なのですが読み間違いが多いのです。速く読むことに気を取られ、つい自分勝手な音で読む癖がついているのです。最近思ったことですが、これはお経の読みだけのことでなく、私の聞法の姿ではないかということ

しょうしんげ



しくみつめておられますが、私は「内は愚」なる姿を忘れ、外に対して「賢なり」を無頓着に示している。今、そのことを慙愧しなければならぬと思つている所です。最後に、「岐阜同朋」への寄稿と

あるご門徒さんのお宅で、こんな出来事がありました。小学2年生になつたばかりの男の子が、

大事なおじいちゃんとお父さんを4ヶ月という短い間に亡くしてしまつたのです。この男の子は、毎月お参りをしていくなかでお内仏に口ウソクとお線香をあげてくれるようになりました。小学4年生になつた頃、お母さんが男の子にこんな事を尋ねたそうです。「お父さんがいなくて寂しくないの?」と。そうす

いと男の子は「僕の心の中で生きています」と答えたそうです。私はこのことを聞いて、「その男の子が、今は会うことができないおじいちゃんやお父さんと、つながり合っているのちを生きているのだ」と感じました。

正信偈の冒頭に、「歸命無量寿如来」(無量寿如来に帰命し)とあります。男の子のこれからの人生には、恐らくいくつもの壁が立ちますが、いつまでも心の前に、おじいちゃんとお父さんの願いが生き続けているのだなと感じたことでした。



愛知県碧南市浜寺町

三河の真宗①

きよざわまんし

清沢満之 終焉の地

西方寺

文・櫛田昭裕

現代親鸞教学の先覚者で人々の心に安楽を願ひ、仏の道をきわめた「明治の親鸞」と呼ばれた清沢満之ゆかりの西方寺を恥ずかしながら初めて訪れ、涙した。

西方寺は、親鸞、蓮如ゆかりの寺で清沢満之以前から知られる三河有数のお寺。

驚いたことに清沢満之は、この寺の門徒には大変嫌われたという。清沢満之は、この寺のわず



清沢満之 (1863-1903)

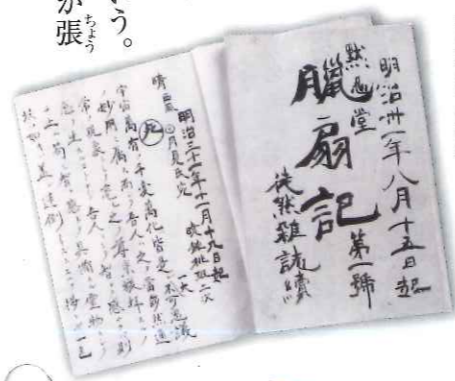
か二畳の部屋で寝食し、明治36年6月6日満39歳で亡くなった。6月4日夜に入つて、大咯血があり、常に側で付き添った原子広宣が枕元で「先生、今度はちよつと危ないです。言い残すことはありませんか?」と涙声で叫んだ。「何もない」と安らかな表情で答えたという。

また、清沢満之が亡くなる直前まで書いていた日記『臘扇記』の裏表紙の余白に

百戦百勝
不如一忍
万言万当
不如一黙

山谷養生印

と記されていたという。これは、黄山谷が張



淑和に贈った言葉(養生の四印)である。
百戦百勝も一つの忍には及ばない。万度も言ったことが、皆道理に合つて相手を負かしたとしても、一つの黙を守るには及ばない。



清沢満之は、地位も職も失い35歳間近で西方寺に副住職として入り、門徒の月参りのお経とお説教に出かけるが、肺病を患っていたために門徒に嫌われた。庶民には娯楽がない時代で、お説教も節をつけておもしろく話すことが大変受けてもてはやされた。そんな中真面目に真剣に他力を語れば語るほどかえつ

くの間が引き取ろうとされたが、忍と黙と感謝を貫き西方寺にとどまり命を賭けて信念の確立を目指された。満38歳で長男(享年11歳)妻(享年36歳)を亡



書斎

仰心の厚かつた亡き母タキの口癖であった「薄紙一重がわからん」との、他力本願への求道の問いへの答えでもあった。ブツダは、シヤカムニ(釈迦牟尼)ともよばれる。シヤカと



西方寺と九重みりんの間の散歩道

くし、自らが亡くなる年である満39歳では三男(享年5歳)を亡くす。家族の不幸が続き、自らも進行する病にもかかわらず「大無量寿経」を研究したり、「精神界」に寄稿し続けた。「他力の救済」を書き記し、さらには最後の力を振り絞つて「わが信念」という文章を書いた。それは、すべて身に起こったことは如来のおはからいだとする他力本願への強い信念を語った言葉であった。この「わが信念」は、信



西方寺境内にある清沢満之記念館

はブツダの属した種族のことでムニは寡黙な人を意味し、転じて聖者をいう。清沢満之の生き様はまさにムニにして信念の人であった。キリストは一生布教して十数人の弟子しかつくることのできなかつたという。親鸞も「弟子一人ももたずそうろう」といわれた。孤高な宗教者清沢満之も彼を理解できる仲間はその間に多くはなかつた。しかし、宗教家としての存在意義は尊大だ。後に大きな道が開けた。

*敬称は略させていただきます
参考資料：清沢満之物語 浅井久夫著

「救い」とは何か？

その2

『撰取不捨』にぐるものおわえとるなり

「友朋早岐」編集委員
尾畑英和

「仏説観無量寿経」をいただく

先回(106号)で、息子阿闍世が父頻婆娑羅王を幽閉し殺害するという悲劇の中にあつて、悩み苦しむ韋提希夫人が釈尊と出会われ救われていく、その「救い」について考えてまいりました。韋提希が自ら「凡夫」の大地に立ち、「阿弥陀の浄土に生まれたい」と願った、そしてそれは決して清らかで美しいだけの世界を望むのではなく、悩み苦しむ我が身の事実と向き合い超えていくことによつてこそ「真実の救い」があるのだ、と教えられたのでした。

その韋提希の救いが説かれる『仏説観無量寿経』は、「汝もし念ずるに能わずは、無量寿仏と称すべし」「汝好くこの語を持つて」といふは、すなわちこれ無量寿仏の名を持つてとなり」といふ釈尊の言を歓喜の中でいただいた

くことで終わるのです。

しかし、この「救い」が韋提希の救いにとどまらないことに重要な意味があります。彼女は、釈尊が亡くなった後の人々がどのような教えに出会っていくのかを我が問題と捉え、「救われた者の責任」を自覚するのです。そして彼女が王妃という椅子をおりて「五百人の侍女」と共に教えを聞き浄土を願う「出発」をしたことによつて、広く「浄土の門」が開かれたと宗祖親鸞聖人は宣言されるのです。

「阿闍世王」は救われるのか？

父頻婆娑羅王を殺害し、母をも殺そうとした阿闍世はその後どうなるのでしょうか。阿闍世の苦悩と救いについては『涅槃経』というお経に引き継がれていきます。親鸞聖人はこの『涅槃経』という

たり前です。それだけのことをしたのですから」。事実も見据え、安易な同情ではない心からの共感によつて王の心は開かれます。自らの罪におのき孤独感に苛まれていた王が著婆を頼りに心を少しずつ開いていきます。著婆は、「善いかな、善いかな、王、罪を作すといえども、心に重悔を生じて慙愧を懐けり」「苦悩を大切に受けとめなさい。自分の犯した罪を恥じ、懺悔することこそ人間として忘れてはならないことです。」と、王の苦悩に共感し、受け止めていくのです。すると、空から父頻婆娑羅の声が「著婆に従い釈尊のところへ行きなさい」と勧めるのです。これを聞き阿闍世王は父の虚空からの声に失神し倒れてしまいます。彼は、看病する母の愛情、我が苦悩に共感してくれる著婆との出会い、そして殺されてもお息子の身を案じ、釈尊のもとに行けと言葉をかける父に出会い直していきます。自らの苦悩によつて本当の大切な人と出会い直した

ことが彼を釈尊(仏陀)へと向かわせます。釈尊はそんな阿闍世王のために涅槃に入らず、阿闍世を待ち、「月愛三昧」という行に入られていくと経典は伝えてい



人間なのだ。」と教えます。その教えを通して、阿闍世は、「私の身勝手さが原因で痛ましいことが起こったが、そのことを関わりのあるすべての人々に知らせよう。自分の苦悩を背負い、間違いをこまかさず、自分の失敗に目を覚ますことを通して仏様の教えを聞いていこう。そのことに自分の生涯を尽くしていこう。」と翻っていくのです。しかし、仏教では本来父親を殺すことは「五逆罪」のひとつとして決して救われない大罪とされています。真実の教

「あなたを抱える問題はあなただけの問題ではない。縁が満ちれば、自分の身勝手さによつて息子が父親を殺すという痛ましい事件をも起こしてしまう。それが

「往生」「信心」という親鸞聖人の「他力」思想に密接な関わりがあると見られたからです。父王の衰弱死(餓死)を聞いた阿闍世は牢獄に行き遺体と対面するところから『涅槃経』のその部分が始まります。遺体を見て初めて彼は自分のしたことと向き合い苦しみ始めるのです。取り返しのつかない大変なことをしてしまったと驚き、自らの犯した罪をおそれ深く後悔します。そしてその精神的苦痛が彼を病気にします。熱を発し、その熱により体中に瘡を作り、膿が出て異臭が漂ったと『涅槃経』に書かれています。だれも近づけない中で、自分を殺そうとした息子ですが、釈尊に出会った母韋提希は息子を見捨てず寄り添い種々の薬を塗るなどして必死で看病するのです。

しかし、この心より生ずる病気はますます重くなつていきます。そこで、マガダ国の大臣達は「心から生じた病い」を治すために、インドの6人の思想家を王に差し向けます(六師外道)。この六師外道の教えは私たちがいるんな問題に出会った時や苦しみを感じた時によく自分や他人に言つて聞かせるような話ですが、親鸞聖人はこの教えをたいへん丁寧に見ていかれます。それを要約しますと、①仕方が無いことだとあきらめよという教え、②忘れることで苦しみから逃れようとする教え、③みんながやっていることだからそんなに気にする必要は無いという教え、等々、無自覚・無責任な内容でした。そんなごまかしや問題のすり替えでは、問題とまともに向き合うことができないと悟った忠臣で異母兄の著婆(医者であり仏弟子)は、阿闍世王に向かい、「大王、安くぞ眠ることを得んや、不や」(大王さま、あなたは眠れないでしょう)、「眠れないのは当

矛盾が浮かび上がります。つまり、「例外なく仏になるが、例外がある。」ということです。親鸞聖人は、この唯除の問題を教行信証・信巻にて「抑止門」として詳しく語られます。また、親鸞聖人最晩年の著作「尊号真像銘文」にも「唯除五逆 誹謗正法」というのは、唯除というは、ただのぞくということばなり。五逆のつみびとをきらい、誹謗のおもきとがをせんとせんとなり。このふたつのつみのおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべし、とせんとせんとなり。」と強く警告・抑止を与えつつ、全ての五逆の罪人をも漏れることなく救う教えが、本願念仏の教えであるとお示しくされています。わたしたちは、「齊しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆謗闡提を恵まんと欲す」(教行信証・総序)という重い重い文言によつて、阿弥陀如来の「ご本願」の確かさと報恩感謝の「お念仏」のこの上ない有難さを実感せずにはおれないのです。